



折々のことば 鷲田 清一 2719

道義の根本は人の悲しみがわかるということにある。
このことが基本にあつてこそ人は日々安心して暮らせるのだと、数学者は説く。だが悲しみの感情とは難しいもの。これを「人が悲しんでいるから自分も悲しい」という程度にまでわかるには時間がかかると。リアルで、時に冷厳にさえ映る政治的決定も、根本はここになければならないと思う。わからないと言いつけることとわかることとは大違い。『春宵十話』から。

岡 潔

2023・5・1

ある日の帰りの電車に、3~4才の女の子を連れた若いママとパパが乗ってきました。女の子とママは私の向かいに、パパは私の隣りに座りました。女の子は目をきらきらさせてあちこち見回しています。ママとパパは...という携帯で自分の世界に...。時々子どもに視線を向けるものの、声をかけたりおしゃべりすることもなく...。1度ママが自分の携帯の画面を女の子に見せて2人で見ていましたが、それ

スマホ あれこれ

朝の浪岡駅のプラットフォームでは、男子高校生が4~5人輪になり、頭を寄せ合せてスマホを見ていました。無言です。

帰りの電車におしゃべりしなから乗ってきた女子高校生は、席に着いたとたん携帯で自分の世界に...

もう少しの時間だけでした。行儀の良い女の子で、騒ぐこともなくじっと座っていました。

見ているととてもとても残念でした。電車に乗るといふ貴重な経験をしている女の子の話を聞いてあげればいいのに。子どもという時は子どもを最優先にしてほしいのに...

私は胸が痛むような気がしました。

論の芽



脳科学者

榊浩平さんに聞く

ついついスマホ... 脳にどんな影響が?

オーストラリア政府はついに16歳未満のSNS規制に乗り出しました。多くの弊害があるとは知りつつ、わかっちゃいるけど手放せないスマホ。「スマホはどこまで脳を壊すか」の著者で脳科学者の榊浩平さん(東北大助教)に、とても怖い話を聞きました。

スマホが最も悪い影響を与えるのは、人間らしさの根幹とも言える脳の前頭前野です。前頭前野は、考える、理解するといった子どもたちが勉強で使う働きや、人とのコミュニケーション、感情の制御などに大きくかかわっています。

これまでの研究で、スマホを使う時間が長い子は勉強時間や睡眠時間とは関係なく学力が下がることや、脳の幅広い領域がほとんど発達しないことなどがわかってきました。

脳は本来ひとつのことにしか集中できないので、スマホの多機能性が悪影響を及ぼし、海外の研究では、現代の人間の集中力は「金魚以下」だという結果も出ています。

何かを調べる際も、紙の辞書を使うかスマホで見るかで、前頭前野の動きがまったく違います。ものごとを記憶にとどめて思い出すというのは、とても労力を使う作業で、それをスマホがやってくれるなら任せよう、と脳は判断するのです。

目的は、情報を得ることなのか、学習することなのか。それを見極め、辞書とスマホを使い分けることが大切です。

親はこれらのリスクをわかった上で、子どもにスマホを与えないと無責任です。

脳は使えば育ち、使わなければどんどんダメになっていきます。活性化させるには読書(特に音読)や、他人とのコミュニケーション、適度な運動が有効です。私たちはスマホに使われるのではなく、何のために使うのか、目的を明確にする必要があります。

とりわけ子どもたちには、1日の使用時間など自分でルールを作らせ、それを守らせることが大切です。本来であれば、オーストラリアのような規制も議論すべきでしょう。

「主人はワシ」心に誓う

先日、スマホを忘れて外出し、それを早く知らせなければとスマホを捜した自分がいました。榊さんの指摘は思い当たるふし満載で、とりわけ集中力低下の主犯は、この電子機器に違いないと決めつけています。ただ、いったん便利さを知ってしまった以上、手放すことは困難。スマホに振り回されず、「主人はワシだ」の上から目線であたろうと心に誓いました。(箱田哲也)

朝日新聞 2024年12月4日

中学生のつぶやき 「この頃 友だちと遊んでも携帯

(電話)持ってる人が多くて、その人たちは話もしないでただ携帯だけいじってるから、全然おもしろくないや。これは2005年8月30日に発行した保健だよりに載せたものです。...あれから19年です。

文責 阿部陽子 スマイルサポート(017-722-3749)

見守ること づける

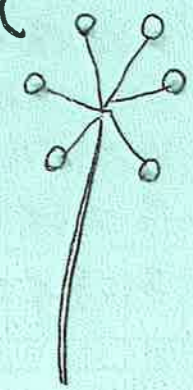


農村の冬は、父親が出稼に行きます。お母さんは頑張つてすごしています。でも、時には両親が不仲になり離婚することがあります。

そんな時、子ども達は悲しみをどうあらわしているかわからない中で、発熱がたえず続き、じつとこらえています。話をきいて見守ることしかできない中で、もどかしいです。小さい子どもたち程、気をつけてみてあげたいと思いました。

どの子も どんなことも(9)
土岐満子

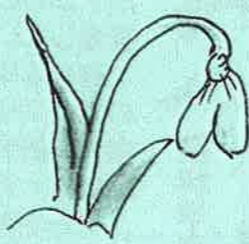
先生を 転任させなくて



一人の若い男性教師が、小学校五年を担当していました。初任者は三年が限度ということに転勤することになりました。子ども達、父母の方は小六まで担任して欲しいと教育長に訴えました。

この地域にいたいという先生をうごかすことは、私ものぞんでいることではないと涙を流して、はなしあいに応じてくれました。転任は変えることは出来なかったが涙を流した人がいたこと忘れないことでした。

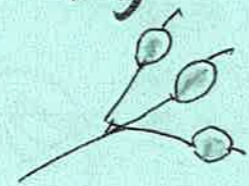
みんなの プールだ



やけどの傷がついている女の子がいました。見えないよう、気を使っただけでいました。夏に、プールに入ること、どうしようかと悩んでいました。

その時、担任の先生が彼女のことを話しました。タイツをはいて入るけど、よろしくと。ばかにしたり、いやがる子どもたちがいなかったこと、彼女が安心してプールに入れてよかった。

子どもの 育ちの はたしあう場 がある



この地域で、子どものことをとりくんでいる人たちがあつまり、子ども達の育ちのようすを、はなしあうことにしました。保育所と小学校、中学校の養護教諭、地域からは保健師さん、栄養士さん、地教委の方と月一回あつまりました。

小さい頃からの育ちと、今のようす、これからのことについて、具体的な事例を出しあいながら、はなすことが出来ました。個人に関することは、まわりにひろめたりせず、その会の中だけに、することにしました。力を合わせることでできました。